

古代文学会二十年のあゆみ

町方 和夫

題目を仰せつかつて、はたと困ってしまいました。そして、すぐに頭をかすめたのは、歌人宮柊二氏の「才無きを恥ぢつつ生きて」の言ふにこそかなしき批評にも会ふ」という歌でした。下句はともかくとしまして、私などはまことに「才無きを恥ぢつつ生きて」いるばかりで、機関誌『古代文学』の創刊の辞にうたっている「純粹にして、真摯・自由な研究を専一に推進」する活動理念を穢しはしないかと常々懸念を抱いているからであります。

古代文学会の二十年の活動、といいますが、どうしてか、二十年という時の経過をピンと感じないのであります。たしかに二十年という歳月の流れは客観的にも厳然と存続してきたわけでありすが、どういったらいいのでしょうか、「時間」という対象（自分に對する）としてではなく、いかなれば「空氣」をただ吸い続けてきたようなものであります。一分間に十七回呼吸するとして一億七千八百七十万四千回余の呼吸をしているわけですが、その重大さ歴大さはいっこうに認識していかないのと同じではないかと思ひます。

というわけで、私には二十年という時の流れには活力を感じさせられません。むしろ、二五〇回という例会数、それも間断なくおこなわれてきた月例会に尊厳なまでの重厚な活力を感じております。創刊の辞に「討論・検討を主眼とする月例研究発表会に第一の重点

を置き、これを本学会伸展の母体とする。」ということばからもわかりますように、月例研究会が相互学習による成果をめざす集団的多数の研究活動の場であることを示した綱領は今もなお堅持されてきておりますし、機関誌『古代文学』は「その成果を学界に示現」する手段として、本学会の活力を遺憾なく發揮し、洛陽の紙価とまではいかないでしょうが『古代文学』の誌価を高めていると信じております。

ところで、題目の「あゆみ」とは何か、ということになりますと、おそらく綱領にいう「伸展」のために文学研究の何を求めてきたかということになりましょう。『古代文学』創刊号の「郵送による討論」で「時代区分」をめぐる「伝承」と「発想」にかかわる方法論の確立が提言されております。別のとらえ方をしますと、言語活動の諸形態と精神の態様の模索ということになりましょうか。これは、以後の『古代文学』の共同研究欄、夏季セミナーの発表要旨等をご覧いただければわかりますように、歴然として發展的に継承してきております。そして、これが究極的に顕著に飛躍した行動の結果が『シリーズ古代の文学』に結集したのだらうと思っております。

夏季セミナーは、毎年箱根でおこなっておりますが、これがまことに熾烈であります。まず、徹宵激論する覚悟と体力を事前に準備しておかなければなりません。特に、発表者は、三時間四時間ものあいだ、「針の筵」（発表者がいまわしげに呼ぶ）の座席で侃々諤々の討論——それは糾明か弾劾に等しいほど——に苦渋に満ちた表情で呻吟するという表現があてはまるぐらいであります。『古代文

学』が例会発表・セミナー発表の要旨を掲載するのは、単に研究活動の紹介を意味するのではなく、集団の多数の討論による研究の行動過程を示すという自負みたいなものに由来するのではないかと思っております。

このような過程をたどってみますと、古代文学会は研究活動の領域を個人の思惟に基づく研究行為から集団の多数の討論による成果の研究行動へ止揚することを目差しており、今日すでに両者を並存せしめているといえましょう。

つまり、月例会・セミナーの口頭発表・討論・論文化の過程はテーマ・論理・反証にかかわって、もはやそれは単独の観念的行為ではなく、他数の会員の学問上の見識・思惟を連帶的に活用した世界であり、いわば機動性を帯びた行動の領域に属しましょう。したがって、筋書にない偶然の状況（厳密には必然的な条理の発見につながるものもある）、不可及性の事象の発見もありましょう。たとえば映画演劇の製作、音楽演奏を展望してみると、それらはキャストとかスタッフの個々の力いかに分力（component force）が結集して、人間の可視能力を超脱した一大光景（spectacle）を統合の実象として存在せしめます。また、古代遺跡の探査も然り。総合的見地に立って、社会と個人、支配と服従（隷従）、男と女、生と死、物と心など想定しうる限りの要件を追究する体制で臨みまします。受動的姿勢、単独行為、セクシヨナリズムのエゴではなしえないでしょう。これらはまさしく機動性をもった作像行動であります。

本学会の夏季セミナーにおいて、言語（45年）、表現（47年）、編

纂（49年）、死（50年）、新しい古代文学史への提言（53年・特集）などはここに言う行動の領域を指向したものではないかと思えます。

文学研究の分力は個性的であり、またその分力自体が単独行為の領域の所産であり、時間の経過を要して独自の総合性を形づくるものと思えます。が、しかし、それだけではスペクタクルにはならないでしょう。個の独立を堅持する単独行為は通時的であっても共時的なものに欠けて全的な捕捉はむずかしいでしょう。仮に、対象を全的に捕捉したと結論づけたとしてもそれはエゴによる錯覚が多いでしょう。これは亢進するにつれて詭弁的にさえなります。でも、これも分力であります。分力は統合力へ向かう可能性を秘め、作用と反作用の関係にあって、行為は行動に変成する属性を持ちます。

本学会の研究活動の形態は叙述した行動の領域に止揚することを志向したものといえましょう。この方向は古代文学が現代人と遊離した孤高の世界で、かつ難解で抵抗感の強い対象（特に青少年層の低関心、興味の薄さは西欧も同様であるとパリのある研究所で聞いた）であるという認識を改めさせることになり、現代人の世界に還元する行動でもあります。古代文学講座がテーマ設定理由を事前に公表掲載するのも行動領域の連帯の具現を求めるものでありましょう。はなはだしく抽象的で、かつ個人的な思いつきでお茶をにごす結果になりましたことをはずかしく思っております。